



月報 岡崎の教育

9 月 号

昭和62年9月1日
発行 / 編集
岡崎市教育委員会

「それっ、えさをやるぞ。」
と、チャボに話しかける孝一。

「ちよつとどいとつて。今、きれいにし
てあげるから。」
と言いながらヤギ小屋を掃く登志江。

「ジャガイモの葉って、とつても元気が
いいね。」

「先生、サルビアのなえが水をほしがっ
ているみたい。」

動物に語りかけ
植物の表情をよむ子どもたち。

「あしたは、いよいよツバメのお別れ式
だね。うまく飛んで行けるかなあ。」
ちよつぴり心配そうな野鳥クラブ員たち
の、思いははるか南の国へ……。

〈対話〉

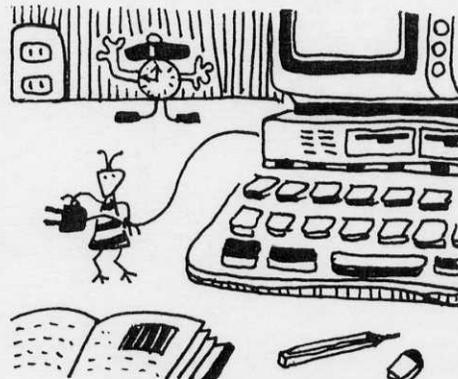


(又会おう、子つばめさん — 上地小)

「あんたは、ちつとも、ひとの話を聴かないじゃないか」

ほろ酔いのいきおいで飲み屋友だちの弁護士に語気を強めたおかげで、七十人近い弁護士さんに「聴くことのコミュニケーション」なる講演をさせられるハメになってしまった。

現代は、老いも若きも、まずしやべることの方が先行するようだ。ある大手の受信機メーカーの社長さんと話していて、



二時間のあいだに、こちらの考えが相手にとどいたのは一、二度だったという記憶がある。作っているのは受信機でも、彼自身は発信機能しか持たない人物なのであろう。

顕示欲にうらうちされた、声高な自己主張がまかり通る中では、他者の声を謙虚に聴くという姿勢は、ともすれば崩れがちだ。聴く、といつても相手の言いな

りになるのではなく、相手のコトバに耳を傾け、その気持ちをひとまず虚心に受けとめる、ということである。

心理療法の開拓者カール・ロジャースは、これをアクティブ・リスニング（積極的傾聴）と名づけ、この生きてゆくうえで姿勢が、人格に深みをまし、濃い人間関係を実現する基本だと説いている。

最近注目されているミヒヤエル・エン

— 教育随想 —

聴く
北林才知

デの童話「モモ」で、主人公の浮浪少女がもっている才能はただひとつ、話が聴けることである。じつとすわって大きな黒い瞳を相手に向け、注意深く聴く。すると、相手には、自分のどこにそんなものがひそんでいたか、と驚くような考えが浮かぶ。ある人は自分の意志がハッキリし、他の人には希望と明るさがわいてくる。そして、

「いや、おれはおれなんだ。世界中の人間の中で、おれという人間はひとりしかない。だから、おれはおれなりに、この世の中で大切な存在なんだ」と気づくところが胸をうつ。

映画「愛は静けさの中に」では、ほんとうの全ろう啞者の掃除婦マリー・マトリンが、知的で行動的なろう啞学校教師ウイリアム・ハートに「あなたの好きなパッハを私に聞かせて」と迫るシーンがある。耳では聞こえなくとも、なんとか相手を全的に受容したいという愛の気魄に胸をつかれ、目がしらが熱くなつた。

四年前、銀座の博品館劇場で上演された「小さな神の子ら」の映画化だが、あのとき主演の影万里江さんがけいこの過労で倒れ、なくなつた。マトリンの役はそれほど困難な演技を求められるのだろう。彼女が昨年のアカデミー女優賞をとつたのもうなずける深い表現が心に残る。

「話し方教室」は多いが「聴き方講座」はまずない。テレビにも、あきらかに聴けない人びとが、ちよくちよく登場するのが気がかりである。弁護士会の会長さんは、「弁護士が自分の筋書きに都合のよい部分だけしか聴いていないことに気がついた」と言われたが、いやいや、ひとごとではない。

NHK 監査室主幹
IPR (対人関係) 研究会理事



真のチャンピオン

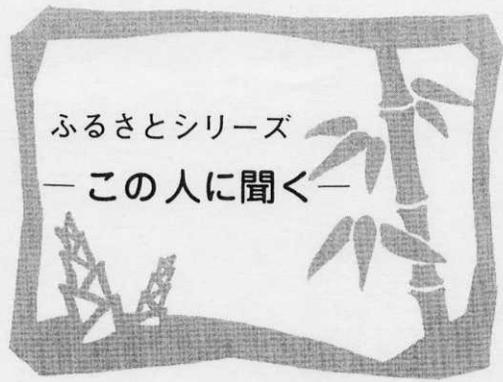
保健体育科指導員
大久保慎一

第九回東海中学総体バレーボール競技は、岡崎市体育館にて開催された。

大会の華、開会式における選手宣誓の大会はN市のA君。愛知県を代表する名プレーヤーである。

大会当日、監督さんに頼まれて、宣誓指導をした時のこと。簡単にと高をくくつたのだが、さてA君、どうしても「左向け左」「立札」「回れ右」ができないのである。方向転換はすべて足を踏みかえてしまう。私の指導に戸惑うA君。そばで心配する監督さん。

「こういう動作は教えませんか。」
「N市ではあまり行いません。」
事の締めは、各県代表による入場行進であった。競技委員長の「しっかりと歩かせてください。」の注文も一向に効き目なし。惨澹たる有様である。
ただ一つ、会場にさわやかさを残したのは地元岡崎の代表T中学校である。胸を張り、腕を振つての堂々の行進が中学



奥さま防災博士

天野 優子 氏

九月一日の「防災の日」を前にして、奥さま防災博士の天野さんを舞木町の自宅に訪ねた。

奥さま防災博士とは、「家庭の防災責任者は主婦である」との考えから、日本損害保険協会が毎年地域防災活動に取り組んでいる主婦を対象に贈っているもので、天野さんは市で初の荣誉に輝いた。

天野さんが会長を務められる岡崎婦人自主防災クラブ連絡協議会は現在二十七クラブ、五四五名の会員で構成されている。その活動についてお聞きした。

「毎年日赤の救急普通科講習会を開いて救急法の基礎知識や技術を習得したり、

防災の日に初期消火や応急救護の訓練などを行っています。また、各クラブでは地区の祭礼や運動会などにも救護のため参加したり、火災予防運動の期間中には広報活動も欠かしません。」

こうした数多くの地道な活動が、天野さんらの献身的な奉仕の精神に支えられていることに頭の下がる思いがした。まとめ役としてのご苦労も多いのではないかと問い、

「私たちの活動を多くの人たちに理解していただきたいと思うのですが、クラブ員勧誘の際に無理強いをするのはいやですね。私たちの行っていることはあくまでも自主的な活動ですから。」

「でも、無理に勧めても、ここで習ったことが役に立ったよ、って言われると、ああよかったなと心から思いますね。」

天野さんは元看護婦さん。人の生命に關しては人一倍敏感になると言われる。「職業柄、けが人を診る機会も多いですし、実際に交通事故の現場に行くわしたこともありませう。そういう時でも、絶対に放つてはおけないんです。」

常日頃から万一の時のことを考え、冷静に対処することの大切さを力説された。今後の展望について、

「来年度、舞木クラブは山中学区全域の組織へと広がります。それを機会に、さらに地域に密着した活動を目指して、子ども会やPTAとの連携を密にし、一人でも多くの人に防災に対する認識を深めていきたいと思います。」

天野さんの夢は、さらに強い組織作りへと大きく広がっていくようだ。

「この活動も主人や子供たちの理解がなければできないことです。」

と、主婦の顔で語られる天野さんは、防災博士といういかめしい名にはそぐわない柔和で明るい方である。しかし、一旦防災の話をされると毅然とした姿勢に変わられる。人の生命の尊さを身をもって体得され、事故や災害の怖さを知ってみえるからだろう。

私たちも、今一度身の回りの防災に目を向けなければならぬと心を新たにしたい。

今日は、防災の日である。

（生年月日 昭和二十六年二月十八日）
（住所 岡崎市舞木町字大正幸毒地）



生の大会として何が大切なのかをはっきり示してくれた。

T中。フルセット・ジュニアの末、ベスト八で惜敗。蓋し、真のチャンピオン。

実践の中で

特殊教育指導員

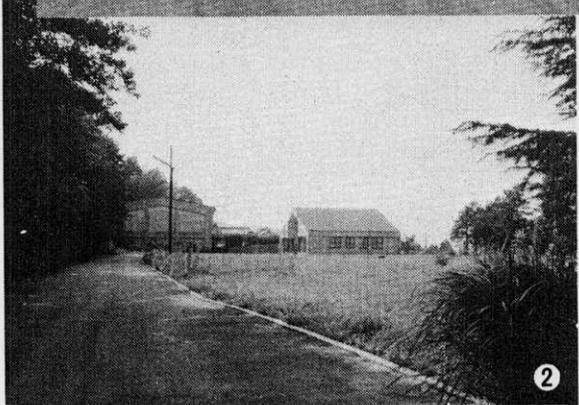
野村 正文

先日、数学の計算問題をさせている時突然M児が「じゅう、じゅう、じゅう」と言い出した。何事かと近寄っていくと繰り上がった十をどうしてよいかかわからず、声となって出たのである。二けた十二けたの繰り上がりのある問題に取り組んでいた時のこと。「この十をここにおいておくと……」このようにして、ついに二けた十二けたの繰り上がりのある問題を解くことができた。わからないことに自分の力でぶつかり、いろいろと考えてなんとかしていかうとした力。これがそが本当の学力であると思う。

こうした背景には、実はM児の学校生活の変化があった。一つのこと集中することができるようになってきたり、教師からの指示がスムーズに聞けるようになってきたりした。また、それ以上に、学校生活全般にわたって担任とM児との信頼関係の深まりが根本にあつたことである。

障害を持つていようといまいと子どもも教師も自分の可能性を發揮できる場を設定していくことこそ、教育実践の本当の姿であると思う。

学校跡地は今



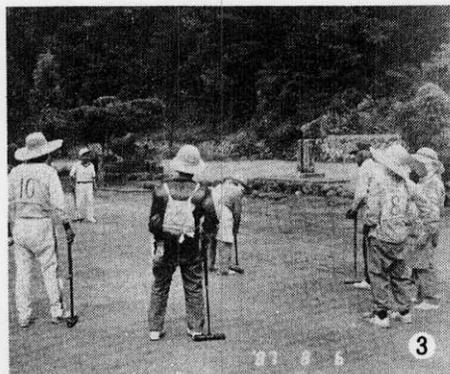
▲昭四四年撮影

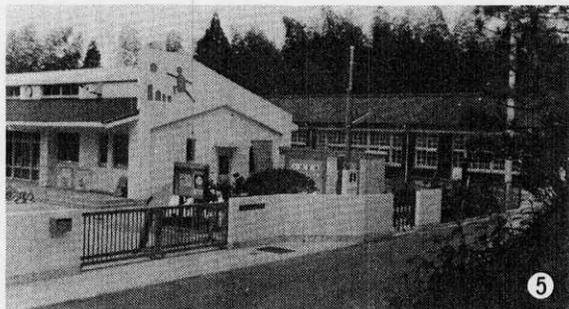
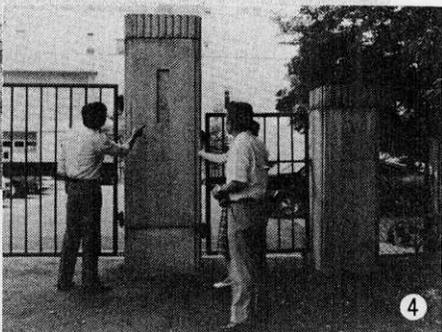
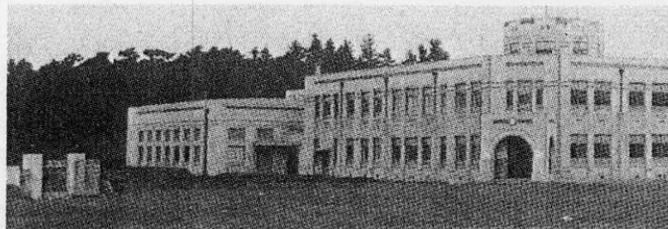
思い出は、その人の心の内に潜む。あ
るものは鮮やかに、またあるものはおぼ
ろげに。時のうつろうままに、やがて消
え失せていくものが多い。
学び舎は心のふるさと。今や新しい地
へ移って飛躍発展している学校。その跡
地は今……。

夏草やつはものどもが夢の跡（芭蕉）

取材巡りをして芭蕉の思いがふとよぎ
る。門柱に、石垣に、背景の山々に。変
わらぬものへのしみじみとした思いと時
の流れと世の中の移り変わりに心驚かさ
れる。

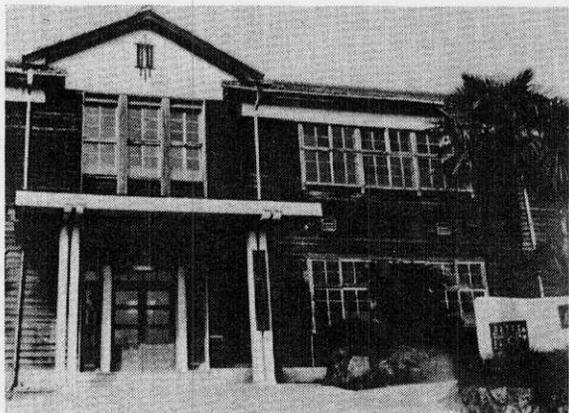
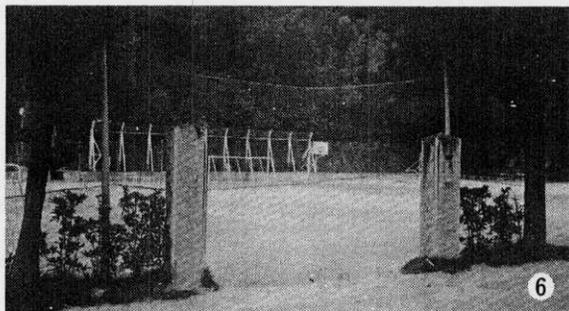
（戦後の移転校を対象とした。）



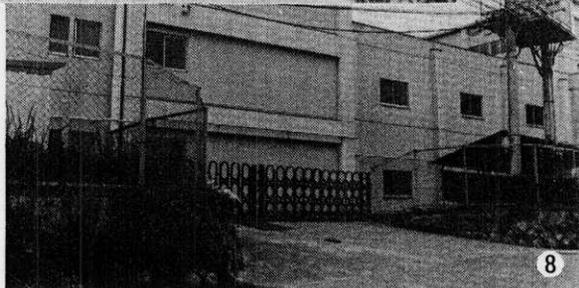


▲昭和六年撮影

- ① 連尺小（康生通西） 体育館を城北会館として利用。スポーツターデン、郵便局本局、駐車場、保育園となる。昭和四一年移転。
- ② 童谷小（桑谷町一斗目） 学区市民ホームとゲートボール場となる。体育館は倉庫として利用。昭和五一年移転。
- ③ 常磐東小（安戸町日向） ゲートボール場として利用。樹木、石垣、記念碑等が残る。昭和六二年移転。
- ④ 三島小（明大寺町西郷中） 昭和六年鉄筋校舎完成。昭和三年現附中の地に移転。学芸大学、分子研となる。門柱が残る。
- ⑤ 香山中（奥殿町根屋敷） 木造理科室・家庭科室が残る。一部岩松保育園となる。校名碑あり。昭和五九年廃校。
- ⑥ 常磐小（滝町山笠） 常磐中グラウンドとして利用。門柱のみ残る。一部中学校校舎が建てられている。昭和五一年移転。
- ⑦ 岡崎小（羽根町南乾地） 南部市民センター、ゲートボール場、一部民家。校庭南の樹木は街路樹として残る。昭和五二年移転。
- ⑧ 岩津中（東蔵前町馬場） 校舎は柵塚の兵舎を移したものである。現在は石垣のみ残して岩津高校となる。昭和四七年移転。



▲昭和四七年撮影



米を作ろう

三島小 河上 咲子

などを持参させて「おにぎり誕生会」をしていた。今年の四月の誕生会もそうすることにした。そのとき、

「ご飯のものは何？」

「お米だよ、先生知らんの？」

「じゃあ、お米はどうして作るのかな？」

「米を土に蒔けばいいじゃん。」

「ほんとかなあ、やってみようか。」

というようなことがあって、子供たちに米を蒔かせて観察させることになった。いっしょに、

「ヒマワリ」の種も蒔くことにした。やがてヒマワリの芽は出でどんどん生長するのに、米の芽は出ないことが問題になった

ころ、A子が家で米を蒔いても芽は出ないことを聞いてきた。

「米ではいけないのなら、何を蒔くのかな？」

「お米にする前の皮のついた種でない」と駄目だった。

「どこへ行くと売ってくれるのかな？」

「お米屋さんへ行けば売ってくれると思うな。」

「じゃあA子さん聞いてきてくれるかな？」

A子は翌朝の朝の会で

「先生、お米屋さんには無いんだって。お百姓さんは持ってい



るんだって。」

こうして、お百姓さんのおばさんと子供たちとの交流が始まり、おばさん先生の指導で「米づくり」が実践されることになったのであった。

六年生に助けってもらった田おこしのおかげで田植えもできたのであった。皆のおかげ、自然のおかげで米づくりができることを感謝してくれるだろう。

教育日々



育てる

六ツ美中 石川 昌文

五月当初、山の学習の具体的な仕事を始める段になり、こうした行事の係になっている三人の中の先輩格である一人が、

「今年の山の学習には○○先生をリーダーにして、△△先生は小学校で経験もあるので補佐に

し、二人でやってもらおうと思えますがどうでしょうか。」と相談を持ってきた。

それを聞き、ためらいがなかったわけではなかったが、特に

○○先生を男にしてやろう、育てようというところで決心した。

学年会に提案、全員賛成して細かく分担を決めてかかった。

協力体制は万全であることを頼んだ。五四〇余名の生徒を導くリーダーは大変だからだ。

仕事はどんどん進んでいった。七月九、十、十一の三日間が山の学習。同月の二、三、四の三日間が期末テストと、何ともあわたたしい日程だった。

若い二人は夜遅くまで仕事を

した。案ができると、先輩格の先生、私、ときには校長に相談した。

彼らには、走り過ぎた考えもあり、ブレーキもかけた。

全員が協力した。それぞれの分担の人の動きが、この若きリーダーを立てていたのか、情熱

にほだされたのか、てきぱきと

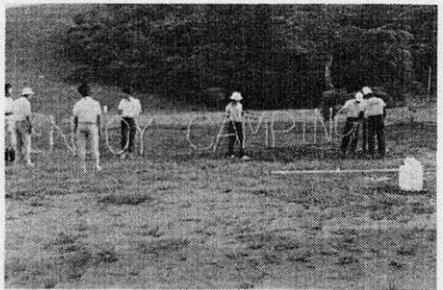
していてもさすがしかった。

山の学習が始まって、まったく変わらなかった。

学級ファイヤーで生徒の中に

溶け込み、夢中に踊りまくって

いる先の先輩教師。



肝試しで、各自の変装、おどし方などをジェスチャーたつぷりに話している先生。テントサイドで、真剣に生徒を指導していた女の先生など。

二泊目の夜十時過ぎ、テント場での先生とカウンセラーの反省会。

若いリーダーに、

「もう終わったようなものだなあご苦労さん。」と礼を言うと、

しばらくして、肩で息をつき、「はあーっ」と笑顔を見せた。

立派に成し遂げた二人に全員

の先生が心からの拍手を送った。

育てると言う行為の中に、実は

自分自身が育てられているのだと逆に感謝した。先輩教師も他の先生も快い疲労感を抱いて山を下ったことだろう。



特選に 矢作中学校 河合中学校 (学校林等活動)

去る八月十七日、昭和六十二年度愛知県学校関係緑化コンクールの入賞校が決まった。

その結果、「緑に学び緑を育て守り、緑を広げよう」―矢作中(学校環境緑化)と、「緑に汗し、緑で育つ」―河合中(学校林活動)が見事特選に選ばれた。(環境緑化の部)

▽特選 県緑推会長賞 矢作中
▽入選 県知事賞 常盤中
県知事賞 大門小
県教委賞 緑丘小

県緑推会長賞 梅園小
(学校林等活動の部)

▽特選 知事賞 河合中
■県鳥獣保護発表大会で晴れの知事賞―生平小学校

八月十二日、愛知県勤労会館

■開館十五周年記念

郷土の文人
鶴田卓池展

9月8日(火)〜27日(日)
開館午前10時〜午後6時
(入館は午後5時30分まで)
休館日、月曜・9月14日・21日
会場 岡崎市美術館
電話 0564-514280

■愛知県中学校総合体育大会

(優勝者)

▽バスケットボール男子 甲山中学校チーム

▽陸上女子百米ハードル 鈴木 優子(福岡中)

▽水泳男子四百米メドレー 矢作北中学校チーム

▽水泳男子二百米個人メドレー 鴨下 剛(矢北中)

▽水泳男子百米平泳ぎ 渡部 修(葵中)

(準優勝者)
▽バレーボール男子 東海中学校チーム

▽水泳男子団体 矢作北中学校チーム

▽陸上男子走り高跳び 志賀 充(美川中)

▽陸上男子二千五百米 柴田 英喜(福岡中)

▽陸上男子八百米 蜂須賀 淳(竜南中)

▽陸上女子二百米 安沢 真理(新香山)

▽水泳男子四百米リレー 矢作北中学校チーム

▽水泳男子二百米平泳ぎ 仙石 祐嗣(矢北中)

▽水泳女子二百米自由形 小里日奈子(葵中)

■県代表に竜海中篠永圭子さん
八月二十一日竜美丘会館で、少年の主張県大会が開催された。県下各地域の代表十三人が熱弁をふるったが、審査の結果、最優秀賞に「生きていく限り」と題して発表した、竜海中三年篠永圭子さんが選ばれ、十一月東京で開かれる全国大会出場が決まった。なお河合中一年島田知春さんも奨励賞を受賞した。

■東海大会で初栄冠

一甲山中男子バスケット部―

甲山中学校男子バスケット部―

ル部が、東海中学校総合体育大会で初優勝。八月十九日から蒲郡で

※全国大会の結果は次号に掲載予定

第40回岡崎市中学校市長杯総合体育大会兼西三河中学校選手権大会岡崎・額田支所予選会結果

種目	性	優勝	2位	3位
軟式野球	男女	城北	竜海	福岡
ソフトボール	男女	葵	城北	美川
ハンドボール	男女	新香山	六ッ美	美川
卓球	男女	幸南	幸美	竜海
バレーボール	男女	東海	幸北	竜南
バスケット	男女	甲山	美川	葵
剣道	男女	顔田	幸東	甲盤
体操	男女	東六	美六	美六
新体操	男女	東美	竜海	甲美
軟式庭球	男女	幸田	城北	東海
水泳競技	男女	矢作北	葵	矢作北
サッカー	男女	新香山	附属	南岩
柔道	男女	竜南	美川	竜海
陸上競技	男女	竜美	美六	竜南

市長杯総合成績

	優勝	準優勝	3位	4位	5位	6位
男子総合	竜海	矢作北	南	城北	矢作	葵
女子総合	矢作北	六ッ美	南	竜海	東海	矢作
男女総合	矢作北	竜海	南	六ッ美	矢作	葵

昭和62年度岡崎市小学校球技大会成績 並びに水泳競技大会成績

種目	性	優勝	2位	3位
ソフトボール	男	竜美丘	梅園	六名
	女	常盤南	山中	矢作南
バレーボール	男	山中	矢作東	男川
	女	上地	竜美丘	城南
バスケットボール	男	大樹寺	城南	梅園
	女	六南	上地	小豆坂
サッカー	男	上地	細川	常盤
	女	矢作北	矢作東	井田
水泳競技	男	矢作北	矢作東	井田
	女	附属	大樹寺	三島



滝町 中根清巳氏蔵

文集「おかざき」 創刊号

本年度第二十五集をかぞえる

文集「おかざき」の創刊号（写真）は、昭和三十一年三月に刊行された。

文集としては、当時額田郡で「村の子」という小中学生の文集が組織的に作られていた。

昭和三十年、岡崎市と額田郡の一部の合併がきまり、新しい国語科の陣容が整い、教科書研究や教材研究がおこなわれるようになった。研究の手ははじめに岡崎でも「村の子」に負けないような文集を作ろうという気運が高まった。

- 表紙写真
- 表紙詩
- カッター

上地小
上地小
校中

校長

松原 暁三
嶋田 稔
大野 幾生

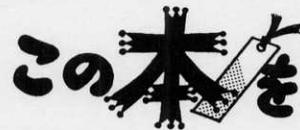
当時の現職教育国語部部长柄

沢道利先生を中心に岸田達夫先生、沢田昇先生、中根清巳先生らが実質の編集をおこなった。

作品の選考にあたっては、糟谷正孝先生や馬場茂先生の指導を受けた。

そのころの国語部の先生方の多くは日本作文の会にも入って勉強した。そのいきおいが創刊号の作品に感じられる。

文集「おかざき」第二号は、どういうわけか昭和三十七年一月に刊行され、創刊号との間に六年の開きがある。



- *若い人とともに考える 竹田弘太郎 ￥1200
PHP研究所
- *林竹二・天の仕事 日向 康 ￥1500
講談社
- *能楽三代 桜間金太郎 ￥2500
白水社
- *敬語 南不二男 ￥480
岩波書店

※人を見る眼仕事を見る眼 PHP研究所編
PHP研究所 ￥980

9歳で奉公に出、21歳で小さな町工場を設立、今日の松下電機を育てた松下幸之助のエピソード集。

「君は劣る人ばかりで困るというが、もし、そういう人があれば、その人を引き立てて、その能力が最大限に発揮できるようにすることを考えるのが責任者の役目やないか」

苦楽を共にしてきた社員や得意先の人人、更には製品を愛し、信頼した幸之助の人生上、経営上の哲学である。

大きな風呂敷で包み、夏休みの創意と工夫をそと抱えて子供たちがやってきた。その大きさにその子の挑戦的意欲が感じられる。つぶらな瞳にその子の成就感が映し出されている。

一人ひとりの製作過程の苦しみや喜び、二学期にかける意気込みを、早々とくみとってやりたい。

消防車や救急車のサイレン音は無性に胸騒ぎを誘うものである。この夏も悲しい水の事故や交通事故が後を絶たなかったことを思うと心が痛む。奥さま防災博士からうかがった貴重なお話の中に「命の尊さ」をひしひしと感じた。今日は防災の日。常日頃の防災意識が大切な命を守ることを心したい。

シ

オ

ス

ア

アカマンマ……道端でよく見る野草イスタデのことである。「イヌ……」の付く野草は多いが「犬」のことではなく「不要」の意味があるという。葉の辛味がなく役に立たないタデだそう。粒状の実を赤飯に見たててままごとにするところから付けられた「アカマンマ」の名の方が似つかわしい。

水中かけっこ、水中じゃんけん、わに歩き。水泳指導の第一歩は、水に慣れ親しむことから始まる。シャワーの水しぶきに驚き、消毒槽の水の冷たさに悲鳴を上げていた一年生も夏休み中の学級指導や、プール開放を経て、すっかり自信を持ったようだ。その力を発揮する校内水泳大会が待っている。